

令和7年度 シャープシューティング体制によるヤクシカの計画捕獲の実施結果

1. 実施目的

- ① 屋久島での林道等においてシャープシューティング（以下、SS）体制による持続可能な実施体制を構築する。
- ② 安全が確保され実行可能な実施スケジュールや規模で実施する。
- ③ 誘引状況に応じた捕獲実績を得る。

2. 実施期間

誘引作業 自動給餌器：令和7年11月9日～12月17日

人による給餌：令和7年12月18日～令和8年1月9日

捕獲作業 令和8年1月8日、9日の2回

3. 実施場所

施業や工事等の事業計画やカメラ調査の結果を基に、屋久島森林管理署と調整してカンカケ林道を実施林道として選定した。

4. 実施方法

テント内で待ち伏せ、現れたシカの群れを射手がライフルを使用して捕獲する誘引狙撃（待機型誘引狙撃）を実施した。

誘引地点から数十メートル離れた場所を待機地点とし、射手と観測手が待機できるテントを設置した。

ヤクシカがテントに馴れるように誘引期間中にテントを設置した。

捕獲の際は林道ゲートを通行止めとして、一般車両が通行できないようにして安全性を確保した。

両日ともセンサーカメラの事前の撮影状況から地点4と5を捕獲地点として選定し、それぞれの地点に射手と観測手のチームをテント内に配置した。

射手と観測手は誘引車両に同乗して、誘引車両が餌を置くため捕獲地点に到着した後、車に隠れながらテントへ入り待機した。

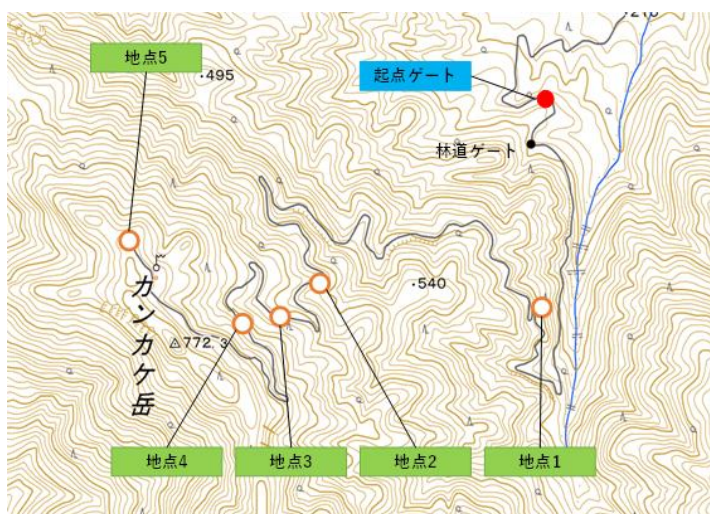


図1. カンカケ林道における誘引地点位置図

5. 誘引状況結果

誘引作業は省力化と誘引期間を長くをとることを目的として自動給餌器による誘引期間と、定時に人が誘引作業を行う2つの期間を設定した。給餌器はヤクシカに誘引地点に餌があることを認識させる地点的な誘引を目的とし、11月9日から1週間程度の間隔で見回りと餌の補充を行った。

12月18日からは捕獲時間にヤクシカを誘引するための時間的な誘引として、定時（13時から）に1日で食べきれる量（250g～500g）の餌を置いて誘引した。餌として粉状ヘイキューブとイヌビワを使用した。

○残存状況（地点的誘引の効果）

給餌器で事前に地点的に誘引できていた地点④や⑤は12月18日以降もほぼ完食していた。その他の地点においても継続的な誘引作業により2週間後には完食するようになった。給餌器を使うことで省力化を図りつつ誘引効果を高めることができた。

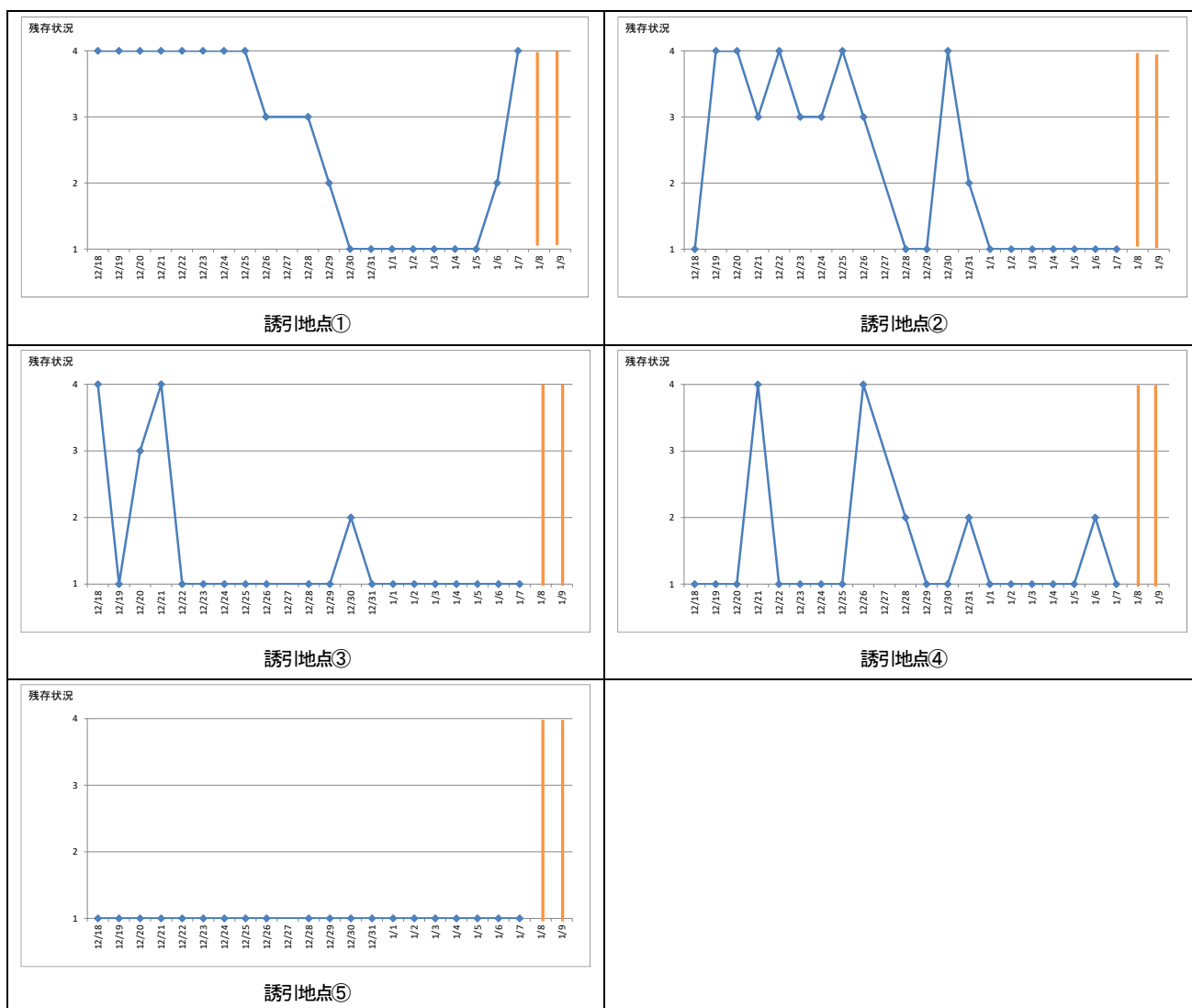


図2. カンカケ林道における誘引状況結果（捕獲実施日 —）

残存状況 1：残存量 0～20%、2：残存量 21～50%、3：残存量 51～80%、4：残存量 81～100%

○センサーカメラによる誘引地点の撮影状況（時間的誘引の効果）

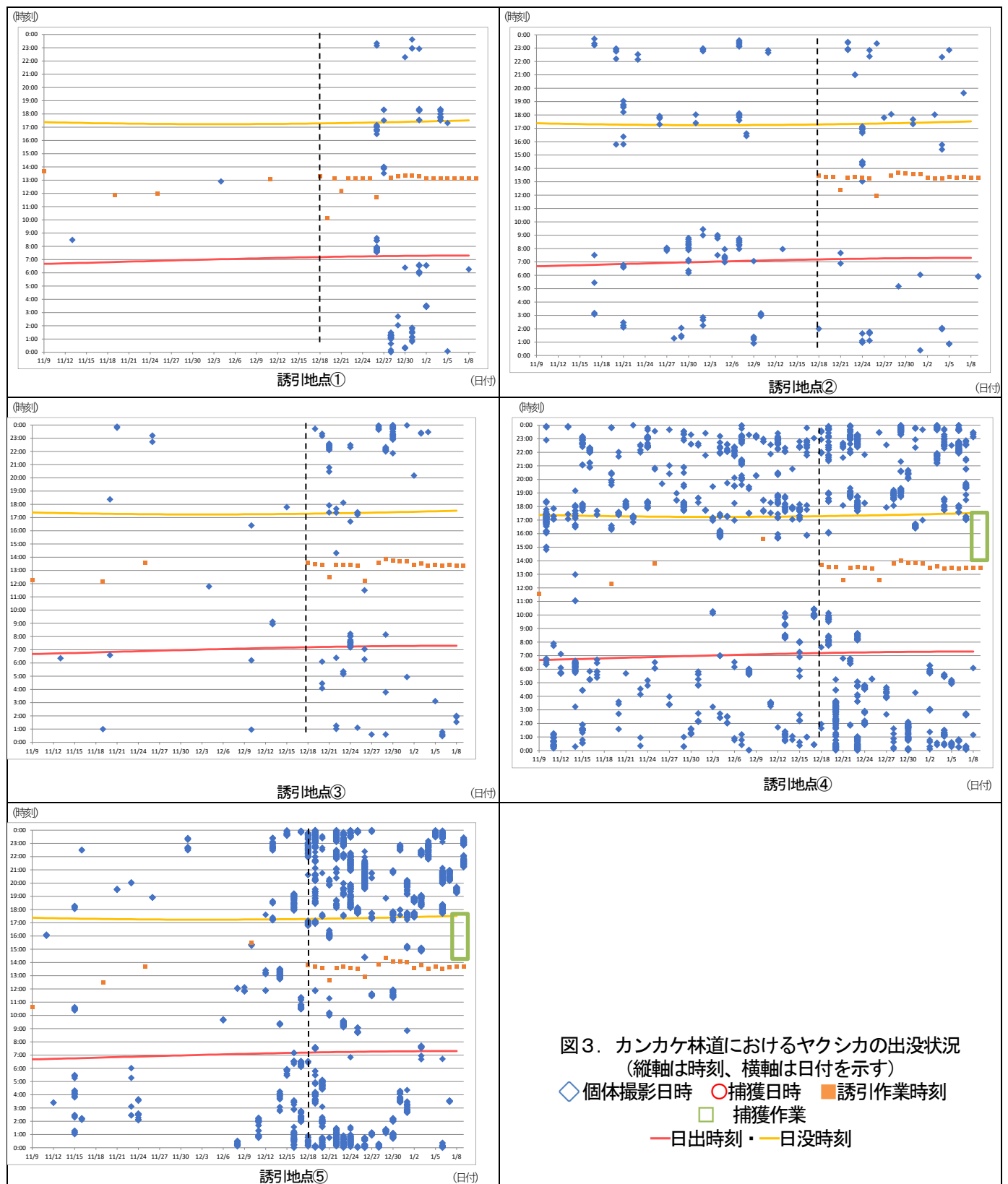


図3. カンカケ林道におけるヤクシカの出没状況
(縦軸は時刻、横軸は日付を示す)

◇ 個体撮影日時 ○ 捕獲日時 ■ 誘引作業時刻
 □ 捕獲作業
 — 日出時刻・— 日没時刻

グラフ中の黒い破線以前は給餌器による誘引（地点的誘引）、以降は定時による誘引作業（時間的誘引）の期間を示す。

給餌器による誘引で徐々に誘引されており、12月18日以降の定時の誘引作業を開始後、誘引作業時刻に徐々に誘引されていることが確認された。また日中より夜間に出没することが多く、日没時刻（→）を境に出没する様子が確認された。

6. 捕獲の実施結果

捕獲は1月8日と9日の2日間実施した。

14時から日没直前の17時30分頃までテント内に待機したが、両日ともに捕獲はなかった。

待機中に周囲でシカの警戒音が聞こえたこともあり、人の気配に警戒して誘引地点へ近づかなかった可能性が考えられる。

7. 課題と今後の方向性

- ・林道の特性上、誘引地点とテント（射点）の距離の確保が難しく、人の気配がシカに伝わった可能性が高い。
- ・3週間の時間的誘引を行っても、日中（捕獲時間帯）にシカを寄せきることができなかった。
- ・長年捕獲事業が行われていた林道でもあるため、人に対する警戒心が高い地域と思われる。
- ・日没時刻を境に出没頻度が高くなっていることから、誘引作業については初期の誘引作業の時刻を日没にあわせて行い、徐々に誘引作業を日中に近づけてヤクシカの出没を日中に誘導することや、捕獲開始を16時から日没までの短時間にして人の気配を小さく抑えるなど、日没時刻を起点にした戦略が重要であると考えられる。
- ・令和8年度は、平成29年度の試験捕獲開始から10年目となる。シャープシューティング体制による計画捕獲の10年間の評価と今後に向けた方向性の検討をすすめる。